

「問い」の主体が紡ぎ出す学びの「物語」を
～"はじめに" に代えて～

学校長 船越 勝

2014年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行することになりました。この紀要も、今号で第38集となりますが、今年度の教育研究発表会を中心に、附属小学校の一年間の研究活動の成果をまとめ、それを全国に発信する役割をこの間ずっと果たしてきました。私たち附属小学校の研究内容が一目でわかると各界から確かな評価をいただいていたと思います。

さて、今年度の附属小学校の研究テーマ（主題）は、「学びをデザインする子どもたち～課題意識の深化を通して～」というものです。その含意は、学びをデザインする、つまり、創り出すのは、何よりも子どもたち自身であり、そうした自主的に学びをデザインしていくことができる力を持った学習主体として子どもたちを育てていくことが私たちの願いだということです。

その際、とりわけ今年度は、「課題意識の深化を通して」という視点を立てて、私たち教師のみとりと支援のあり方を問いました。

私は、この「課題意識の深化を通して」という視点は、次のような研究と実践のパーспекティブをもっていると受け取りました。

子どもは、様々なもの・こと・ひととの「出会い」のなかで、自らの学びの「広がり」と「深まり」と「高まり」を生み出していきます。ここでいう学びの「広がり」とは、学びの領域や視野の広がりを指しています。次に、学びの「深まり」とは、対象の世界の理解が、表層的なものから深層の世界へと深まっていくことを意味しています。最後に、学びの「高まり」とは、学びを追究していく子どもの主体性の「高まり」のことです。

このような個の学びの「広がり」と「深まり」と「高まり」は、教室のなかで、教室の仲間の学びの「広がり」と「深まり」と「高まり」に出会い、交叉し、交響するなかで、いっそう促進されることとなります。

こうしたなかで、子どもは自分なりの「課題意識」を深め、自らの本然の「問い」を生成していきます。私たち教師は、こうした一人一人の子どもたちの学びのなか／間に生まれた事実をみとり、自ら「課題意識」を持って、学びを自主的にデザインする子どもたちが育っていくように、さらにいえば、子どもたちは「問い」の主体として、自らの「課題意識」に沿って学びを探究的に深めていき、教室が子どもたちの紡ぎ出す学びの「物語」（ストーリー）の立ち上がっていく場になっていくように支援していくことが求められているのだと思います。

このように考えると、「学びをデザインする子どもたち」と「課題意識の深化を通して」という視点は、新しい子ども像だけでなく、新しい学びの生成のあり方というパーспекティブを提起していることにもなるのです。

こうした意味合いも含んだ私たちの研究成果をまとめたこの紀要を是非ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。また、この紀要が私たち附属小学校と公立校の現場との「課題意識」を共有し、深めるツールになっていければと望んでいます。

最後になりましたが、今年度も本校の様々な教育研究活動にご協力いただきました皆様に感謝するとともに、来年度も引き続き皆様とともに歩んでいきたいと願っております。

2015年3月